「我に触れるな」の禁令に対峙する、美的現代性の桎梏

視覚性から触覚性への転回へ

稲賀繁美

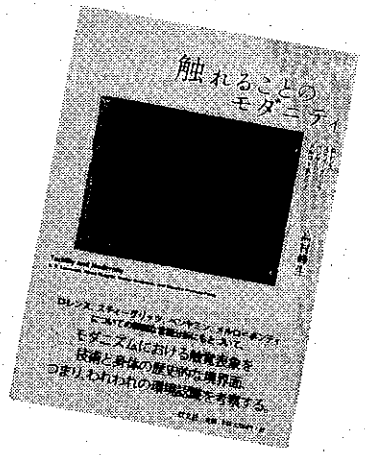
book

▶触れることのモダニティ

ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ

2・27刊　A5判318頁　本体3200円

以文社



ノリ・メ・タンゲレ「我に触れるな」とは、復活したイエスが、その体に触れようとしたマグダラのマリアに対して発した言葉として知られる。この文句を何度か作品に引用しているD.H.ロレンスは、フィレンツェ近郊の丘陵、フィエーソレに滞在し、最晩年に『エトルリアの故地』（1927）を残す。ムッソリーニが「握手より衛生的」との理由で導入した「ローマ式敬礼」は、実際にはフランス新古典派の画家ダヴィッドの《ホラティウス三兄弟の誓い》に由来し、ダヴィンチオ脚本の叙事詩映画《カビリア》（1914）などで普及したという。ロレンスはこのファシスト党の「接触忌避」とは対極をなす触覚的身体性を、エトルリア遺跡の壁画やテラコッタ像に見出した。そのエトルリアの触覚的感性をロレンスは画家セザンヌの絵画にも見出す。画家の「リンゴ性」appleness の追求は当時の通念から「不潔」で「不道徳」との批判を招く。そうした「潔癖さ」の触覚忌避に潜む「偽り」を訴えるのが、noli me tangere の禁忌を破ろうとするロレンスの生命の「倫理」だった。

手仕事Handwerkの残す痕跡は触覚と無縁でないが、ヴァルター・ベンヤミンにとって、経験の伝達は触れることtangereに存する。そのベンヤミンは写真や映画といった複製藝術が作り手の「手」を開放した一方で、ダダイズムや映画に代表されるメディアは作品を鑑賞者に接近させる限りで「触覚的」taktischだと呼ぶ（ただしこの語は通常は「戦術的」の意味）。そう主張する著者は、ベンヤミンへのアロイス・リーグルやルートヴィッヒ・クラーゲスの感化を指摘し、過去の魂の累積が律動をなして原型Urbildへと現象するとみるクラーゲスの説を、故郷への憧憬が詩の韻により触知的に体験されるとみるベンヤミンの議論に重ね合わす。日本でいえば折口信夫の「憧憬」論から三木成夫の「命の波」に至る系譜が想起されるが、これがベンヤミンの歴史哲学に接続される。根源Ursprungに触れるタブー、根源からの疎外が「均質な時間としての歴史」という欺瞞の生成Entstehungと表裏をなすとの認識である。

元来アウラとは息吹であるが、均質な時間が支配する「普遍史」はアウラの風のそよぎを殺し、機械的な模造複製Abbildを量産する。ロレンスのファシスト忌避が、ここでベンヤミンのナチズム批判と平仄を合わす。ナチス政権の訴える「非常時」とは、接触を簒奪する統制を手段とした絶対覇権の掌握・貫徹なのだから。

さらにベンヤミンの「翻訳者の使命」では、円の接線という比喩が語られる。原作という円に翻訳が接するのは無限小の接点におけるほんの一瞬の出来事、「すぐにも逃げ去る接触」Flüchtiger Berührungに過ぎず、そこには未来へと「吹き飛ばされて」「後退」しながら過去の廃墟へと視線を投げる、かのパウル・クレーの作品から霊感を得た「新しい天使」の姿も重なってくる。Betastenが能動態の「触る」ならberührenは受動態というより中動態の「触れる」に相当する。ドイツ語についてはハイデガーに、日本語については坂部恵（増田一夫によってフランス語に翻訳された論文）に精緻な議論があった。翻訳はいかに原史Urgeschichteに触れ得るのか、否か。

「根源への志向は生成と消滅から発生する」と説くベンヤミンの翻訳論には、私見ではカバラーの下地を無視できまい。「純粋言語」とは根源における破砕が残した空隙であり、それを残された破片によって後付けで埋め戻して修復しようとする営為が翻訳による救済作業にほかならない。それは定義からして「死後の生」を求める営みであり、もとより「絶えざる変容」の裡にしかない。「根源は生成の川のなかに渦としてあり、生成の材料を自らの律動のなかに巻き込んでしまう」のだから。

このイメージBildはあたかも唯識が説く瀑布に落ちる水流を思わせる。滝の水音は永遠に更新される瞬時だが、それは翻訳の営みにあっては、アウラの風に触れて鳴る風琴と化す。翻訳は交通Verkehrだが、交通は比喩metaphorの語源でもあった。生々流転はクラーゲスがヘラクリトスから引用する万物流転でもあり、時の後先を捻転するanachronismは「比喩」として輪廻転生に接して「翻訳」できよう……。

英文博士論文の和訳に基づく著作の第二章と第三章に触れて私見を挟んだ。スティーグリッツとその周辺を分析する第二章は、「接触」の比喩の奔流に身を振らせる。またモーリス・メルロ＝ポンティのキアスムkiasmaを扱う最終章は、接点に生じる受動と能動の蝶番charnièreと裂開écartを軸に、創作における時間性の実現réalisationをセザンヌとプルーストに接しつつ展開する。過去との偶発的な触知的遭遇contingenceの議論は、さらに九鬼周造などを触媒にする可能性をも秘めている。

英語圏の研究事情に強い著者が、この先日本の事例にも触れつつ、さらに様々な接触圏に触角を伸ばされんことを期待したい。

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）